

総理の格付け⑤ 中曽根康弘く三公社民営化く

政治アナリスト
元杏林大学教授

豊島典雄

国家を体現した男

昨年1月から日本政府はコロナウィルスに振り回されている。安倍総理はコロナ対応に疲れ、持病の潰瘍性大腸炎を悪化させ退陣。菅義偉内閣もコロナウィルス対応に四苦八苦し、内閣支持率は危険水域の3割を割っている。

菅内閣の兵力の逐次投入のガダルカナル型の対応を見ると、伊豆大島の三原山噴火時の全島避難や三公社民営化等の大きな政治を成し遂げた中曽根内閣の手腕を思い出して比較してしまう。政治家とは、「歴史という名の法廷で裁かれる被告である」(中曽根康弘)が、総理在任5年、中曽根は危機に強い政治家であった。「棺を蓋いて事定まる」。中曽根は2019年に逝去したが、平成以降の政治家にはいないスケールの大きな政治家であった。

中曽根は1972年11月に戦後政

治の総決算を掲げて組閣し、日本国有鉄道、日本電信電話公社、日本専売公社の民営化という歴史的業績を残した。また、同盟国米国のレーガン大統領との間にロンヤス関係と言われる親密な関係を築き、サミットの間などでリーダーシップを発揮し、日本の国際的地位を向上させた。「国家を体現した男」(石原慎太郎元都知事)であり、危機に頼れる大統領型の総理であった。

中曽根は1918年(大正7年)に群馬県の本木屋に生まれ、東大法学部卒後、内務省入省、戦時中は海軍(主計少佐)。戦後の1947年、マッカーサー憲法改正を唱えて群馬県から衆議院議員に立候補して当選。科技庁長官、防衛庁長官、通産大臣、行政管理庁長官、自民党幹事長等の要職を歴任し、1982年11月25日〜1987年10月31日まで総理大臣。

一昨年(2019)、101歳で大往生したが、自作の俳句「暮れてなお命の限り蝉しぐれ」そのもの的一生であった。

松村謙三が中曽根を「緋緘ひきせしの鎧をつけた若武者」と評したが、青年代議士時代から目立った。米国製の憲法の改正を唱える歌を作ったり、「首相と恋人は自分で選ぼう」と首相公選を唱えて運動したこともある。

生涯一書生

中曽根は派手なパフォーマンスの一方で、「我以外皆我が師」の姿勢で学び、「生涯一書生」(藤波孝生元官房長官)とも言われた。昭和末の政界の権力闘争は「血を流さない戦」であったが、中曽根は自作の俳句「たたかと言われて久し栗をむく」のように、「政界遊泳術」はしたたかそのものであった。

1972年のポスト佐藤榮作の自

民党総裁選は、三角大福中(三木武夫・田中角栄・大平正芳・福田赳夫・中曽根康弘)の争いであった。中曽根は立候補せず、郷土の群馬県民が大きな期待を寄せた福田赳夫を支援せず、田中角栄を支援した。中間派が雪崩のように田中角栄支援に走りかけを作った。中曽根の動きが事実上、田中勝利の決め手となった。

1980年には、中曽根は反主流派だったが、社会党提出の大平正芳内閣不信任決議案の採決に際して、欠席した反主流派の福田赳夫、三木武夫と土壇場で別れて、本会議場に入り、不信任決議案に反対した。これで主流派の田中、大平連合に認められるようになり、天下取りの道が開かれる。

中曽根はよく風見鶏と陰口された。しかし、海軍軍人の体験のある中曽根は「風の方向を知らずに政治はできっこない。私も風見鶏と言わ



ロンヤス関係と言われる親密な関係

れるが、日本にいちばん大事なのは風見鶏だ」と嘯いていた。

1982年10月のポスト鈴木善幸の自民党総裁選で、キングメーカーの田中角栄の支持を得て総裁選に勝利する。

「はるけくもきつるものかな萩の原」。中曽根が総理に就任した時の感慨である。「カラツ風の吹く上州から、材木屋のせがれが菌を食いしばり、風雨にうたれながらたどりついた『萩の原』である(私の履歴書)。

組閣では田中系を重用し、マスコミから「田中曽根政権」と揶揄されたが、意に介さなかった。中曽根は「私の政治哲学は『政治家は実績であり、内閣は仕事である』ということであった。格好のいい内閣を作っ

ても、仕事の実績が残らなければ、間もなく泡のように消える。格好の悪い内閣でも、大いに仕事をやれば、そのうちに国民の支持を得て歴史に残る(私の履歴書)という腹構えだった。『仕事師内閣』の誕生である。

三公社の民営化

中曽根は坐禅に水泳でイメージアップをはかりながら、行政改革に挑んだ。対象の三公社には強力な労組があり、その声を代弁する野党第1党の社会党等がいた。だから、三公社民営化は至難と見られていた。

中曽根が岸信介元総理に挨拶に行った際に、「中曽根君、日本で行革が成功したのは明治維新とマツカーサーだけだ。革命やクーデターでなければできないほどのことですよ」と言われている。

中曽根は不退転の決意で強い指導力を発揮して国鉄、電電公社は分割民営化、専売公社は民営化しJITにすることに成功した。国民の利便向上、国の財政に大きく貢献したのである。しかも、平時にこれだけの仕事をやってのけたのである。

三公社の中でも最も大きな目玉が国鉄の分割民営化だった。「国民の

誰しもが国鉄の現状に不満を抱いており、国鉄の人々は、サービスの何たるかを忘れ、世論を敵に回していたことに無頓着すぎました」(中曽根康弘著『自省録』)。

分割民営化に消極的な仁杉国鉄総裁、縄田副総裁を辞任に追い込んだ中曽根の強い指導力は見事であった。中曽根も後に

「それにしても、今から思えば、これが決定的な出来事でした。いわば、天王山で、仁杉さんの辞表提出がなければ、国鉄改革はできなかったでしょう。恐らく、骨抜きにされていたはずで、政治の究極は、最高指導者の決意にあるのです」「ほかの二公社とはくらべものにならない抵抗の強さが国鉄にはありました。国労(国鉄労働組合)、総評(日本労働組合総評議会)があり、社会党が控えていました。仁杉君、縄田君のクビを取って国労が総崩れになって比較的スムーズに運びました。が、それまでは、まさかあんなに上手く行くとは思ってもみませんでした。世間一般の認識も、国鉄の分割民営化などできるわけがないというものでした」(自省録)と述懐して

いる。また、この国鉄の分割民営化は、「国労の崩壊、総評の衰退、社会党の退潮に拍車をかけて、55年体制を終末に導く大きな役割を果たしたのです」(自省録)。

政治的効果はまことに大きかった。

ダブル選挙に圧勝

中曽根には衆参同日選挙、ダブル選挙を断行して圧勝し政局の安定をもたらした功績もある。1986年6月に、死んだふり解散で中曽根内閣は7月7日投票のダブル選挙に圧勝したのである。

この時は早くから解散風が吹いていたが、中曽根はその素振りも見せず、解散風が遠のいた時点でいきなり衆議院解散に打って出たのだ。

衆議院は自民党300、社会党85、公明党56、共産党26、民社党26、新自由クラブ6議席であった。

参議院は、自民党72、社会党20、公明党10、共産党9、民社党5、新自由クラブ1議席。戦後政治史に残る見事な勝利であった。

この圧勝は中曽根に総裁任期の延長、ポスト中曽根での後継者指名の力を与えた。